

## 五月雨どろっふ

谷野七音（中央大学）

あの日も雨が降っていた

ふられた私は当たったところがやけに

やけにじんと冷たくて

大粒たちに降られてるとあまり気づけないけど

雨ってさ、あの窓ガラスをなぞるとき、僕らとおんなじ指をしている。

刹那く冷たいその指を見て、思い出したように人は温もりを求める

それでも行き場がないから

垂れるそれと指を重ねてお天道様と交信する

明日の天気なんて知らなくていい

今日あなたの熱がほしいと天に投げる

あなたも私と同じように、そう。

願って、祈ってくれたなら。

十折り重ねたこの指をあたたためてくれたから。

私はあたしでいられたの。

この誰にでも届く水の指もあなたのやさしい指になってくれたなら。

あたしは私にだってなるの。